

[外国語]

小学校外国語科における「話すこと [やり取り]」への 動機づけを高める指導の工夫

－自己効力感に焦点を当てたSmall Talkの実践から－

早津 康平*

1 主題設定の理由

小学校学習指導要領外国語科「話すこと [やり取り]」の領域では、「自分のことや身の回りの物に関する事柄について、その場で質問したり、質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする」ことを目標の一つに掲げている。「その場で」というのは、[やり取り]の際に、それまでの学習や経験で蓄積した英語で話す力・聞く力を駆使して、自分の力で質問したり、答えたりすることができるようになることを指している（文部科学省，2017a）。すなわち、「話すこと [やり取り]」の領域では、既習表現を用いて自分の考えや気持ちをその場で伝え合う、即興的な言語活動を行っていく必要がある。

『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省，2017b）には、即興的な言語活動の例としてSmall Talkが提案されている。同書では、Small Talkは「あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。5年生は指導者の話を聞くことを中心に、6年生はペアで伝え合うことを中心に行う。」と説明されている。さらに、Small Talkを行う主な目的として、①既習表現をくり返し使用できるようにしてその定着を図ること、②対話の続け方を指導すること、の2点が挙げられている。既習の表現をその場で用いる即興的なやり取りであるSmall Talkを継続して実施することにより、児童の「即興でやり取りする力」を高めていくことができると考えられる。

しかしながら、筆者が担任している6学年児童のSmall Talkに取り組む様子を見てみると、「何を話せばいいかわからない」「すぐに会話が止まってしまう」といった言語運用能力面での困難さと共に、「間違えたくない」「英語を話すのが不安」といった情意面での課題が大きいと感じた。そして、単にこのままSmall Talkを継続しても、児童の不安感を増長させ、英語で対話することへの意欲を低下させてしまう一方であることが危惧された。このような児童の実態から、英語でやり取りすることに不安を感じている児童が自信をもち、意欲が高まる指導が必要であると考えた。

そこで、特定の課題に対する自信と解釈される自己効力感という概念に注目する。自己効力感とは人がある行動をうまく遂行できるかという信念である（Bandura, 1977）。言い換えるならば、ある行動を起こす前にその個人が感じる遂行可能感、あるいはある課題に対する自信といったものが自己効力感である。心理学の分野では動機づけ理論の一つとして自己効力感理論が確立されており、高い自己効力感は、動機づけや学習行動を維持させることにつながるとされている（Dörnyei, 2005）。Bandura（1977）によれば、自己効力感が変化する情報源には、以下のようなものがあるとされている。

- ・ 遂行行動の達成：自分で実際に行い、成功体験をもつこと。
- ・ 代理的体験：他人の成功や失敗の様子を観察することで、「自分にもできそうだと感じたり、逆に自信を弱めたりすること。
- ・ 言語的説得：自己強化や他者からの説得的な暗示を受けること。
- ・ 情動的喚起：「今日は気分がいいからうまくやれそうだと」いうように、自分の心理的な反応の変化に応じて自己効力感を喚起すること。

この中でも筆者は、遂行行動の達成と代理的体験に焦点を当て、授業改善を図ろうと考えた。児童同士がやり取りするSmall Talkにおいて、児童が自身の成功体験を自覚したり、他の児童の成功体験場面を観察したりできるような手立てを講じることにより、英語でのやり取りに対する児童の自己効力感と動機づけを高める授業実践を目指すことにした。

*妙高市立斐太北小学校

2 研究の目的

本研究の目的は、小学校外国語科において自己効力感の理論を活用したSmall Talkの指導が、「話すこと [やり取り]」への自己効力感と動機づけを高めるために有効であるかを明らかにすることである。

3 具体的な手立て

(1) 日本語でのペアトークとの連携（遂行行動の達成）

Small Talkを行う自学級の児童の様子を観察していると、英語でどう話したらよいか分からないという困り感と共に、そもそも何を話したらよいか分からないという困り感も同様に抱いており、沈黙のまま時間だけが過ぎてしまう様子が多く見られた。内山・染谷（2019）は、指導者の話を聞くことを中心としたSmall Talkに焦点を当て、児童の英語が聞き取れたという動機づけを高める実践を行なっている。具体的には、朝の会でよく行われる「先生の話」の内容を、外国語活動の時間に英語を用いてもう一度話すという方法である。この実践では、Small Talkの内容が予め日本語で聞き、理解しているものであるため、意味理解が容易となり、英語の学習意欲に対して肯定的な児童の反応が見られたことが明らかとなった。

そこで、本実践においても、日本語での活動を効果的に用いることで、「話すこと [やり取り]」に対する児童の動機を高めることができるのではないかと考えた。具体的には、筆者の学級において朝の会で行われていた1分間のペアトークの話題とその日の外国語のSmall Talkで話す話題を同様のものにするという方法である。例えば、朝の会では、「好きなスポーツは？」という話題で1分間日本語で対話し、外国語科の授業のSmall Talkでは好きなスポーツについて英語で対話するという形式である。これにより、Small Talkでどんな内容を話せばよいかを想起しやすくなるだけでなく、日本語でのやりとりを通して対話の流れをイメージすることができる。よって児童の助力となり、不安感の低減につながると考えた。「どんなことを話せばいいのだろう」といった児童の不安感を軽減し、「伝えたいことをその場で考えて話せた」という成功体験を児童に実感させることをねらった手立てである。

(2) 他の児童の対話の観察（代理的体験）

外国語科の授業において、教師とALTの対話をモデルとして児童に提示する機会は多くあるが、児童同士の対話を他の児童がモデルとして見るという機会はあまり多くないように思われる。児童同士の対話をモデルとして観察することで、「友達の～さんができているから、自分にもできそうだ」といった児童の気持ちが高まり、自己効力感の向上が期待できると考えた。そこで、児童がタブレット端末で自分たちの対話の様子を録画し、それを「ロイロノート・スクール」という授業支援アプリを活用してクラスの全員が共有できるようにした（図1）。教師が児童の対話の様子をモデルとして提示したり、振り返りの時間等に自由に友達の対話の様子を視聴できるようにしたりしたことで、友達の対話をモデルとして見ることを可能にした。より身近な存在である友達の対話の様子を観察することで代理的体験を経験し、自分にもできそうだという自己効力感を高めることをねらった手立てである。



図1 Small Talkの様子

(3) 振り返り場面での対話録画映像の視聴（遂行行動の達成）

自己効力感を高めるには、学習者が成功体験を自覚することが重要であり、振り返りの時間が鍵となる。学習者が自身の活動を振り返り、「英語が話せた」「対話が続いた」といったことを実感することで、成功体験を自覚できる。しかし、振り返りを行う自学級の児童の様子を見てみると、自身の対話の様子を具体的に思い出して振り返ることへの難しさが感じられた。

牧野（2014）は、大学生を対象にしたスピーチトレーニングにおいて、カメラ付き携帯電話の録画機能を使用し、自身のスピーチの上達を実感させ、英語を話すことに対する自己効力感を高めることをねらいとした実践を行っている。実践の結果、カメラ付き携帯電話で自身のスピーチを録画し、パフォーマンスを自己評価することで、スピーチの上達を実感し、それに伴って自己効力感も向上したことが報告されている。

そこで、小学生を対象としたSmall Talkにおいても、タブレット端末の録画機能を活用した振り返りを行うことで、児童の自己効力感を高めるのではないかと考えた。児童はタブレット端末で自身の対話の様子を録画して

おき、振り返りの際にそれを視聴することで、「～と英語で言えた」「リアクションがとれている」など、自分のパフォーマンスを具体的に評価することができる。また、以前の対話と比較することにより、自身の成長を実感することも可能となる。タブレット端末の録画機能を活用し、自身の対話を具体的に自己評価することで、児童の成功体験の自覚を促すことをねらった手立てである。

4 研究の方法

- (1) 実施時期：2021年6月～7月
- (2) 参加者：小学校6年生 18名
- (3) 活動計画 「Small Talkで対話を続けよう」

6月から7月にかけて、外国語科の授業の2回に1回程度の割合で、帯活動的に全7回のSmall Talkを行った。ここでのSmall Talkは児童同士のやり取りが中心であり、既習事項の定着をねらいとしたものである。活動の手順は『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省、2017b）で示されていたものを参考にし（図2）、対話を続けるコツとして図3を児童に提示した。

各回の話題は表1に示す通りである。学習進度との関連を図りながら、児童にとって無理のないものを教師が設定した。対話するペアは毎時間無作為に教師が組み、その日の日本語でのペアトークを行ったペアとは異なるようにした。

表1 Small Talkの話題

時	話題	主な使用表現
1	好きなフルーツは？	What fruits do you like?
2	好きなスポーツは？	What sports do you like?
3	好きな食べものは？	What food do you like?
4	お気に入りの教科は？	What is your favorite subject?
5	あなたが得意なことは？	What are you good at?
6	誕生日に欲しいものは？	When is your birthday? What do you want?
7	妙高市に欲しいものは？	What do you want in Myoko?

(4) 測定方法

- ① 児童の振り返りカードへの回答と自由記述（図4）
- ② 外国語科についての意識調査
- ③ A R C S動機づけモデル（Keller, 2009）に基づくアンケート

5 実践の結果と考察

(1) 動機づけ

① 振り返りカードの自己評価

児童は、Small Talkの活動後に、毎回振り返りカードを記述した。振り返りカードの項目についてはAを3、Bを2、Cを1とし、Aの方が肯定的な回答とした。児童の自己評価の平均値を表2に示した。

表2 自己評価の一覧（N=18）

項目内容	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目
1 楽しく取り組みましたか	2.67	2.83	2.89	2.89	2.94	2.83	2.89
2 自分の思いや考えを英語で話せましたか	1.94	2.41	2.67	2.50	2.53	2.59	2.81
3 相手の話に対してあいづちやリアクションができましたか	2.11	2.47	2.61	2.31	2.65	2.59	2.69

- ①導入：指導者が児童とやり取りしながら話題を導入する。
- ②1回目のやり取り：児童同士でやり取りを行う。
- ③中間指導：児童が伝えたくても表現できなかったことはないか確認する。
- ④2回目のやり取り：児童同士で2回目のやり取りを行う。
- ⑤振り返り：Small Talkの振り返りを行う。

図2 Small Talkの手順

対話を続けるための表現（リアクションの例）

対話の開始	Hello. / How are you? /
くり返し	相手：I like baseball. 自分：(Oh,) baseball.
一言感想・相づち	That's good. / That's nice. / Really? / That sounds good. / Wow! / I see. / Me too.
確かめ	Pardon? / Once more, please.
さらに質問	相手：I like fruits. 自分：What fruits do you like? Why? / ~or ~. / Anything else? /
対話の終了	Nice talking to you. / You, too.

図3 「対話を続けるコツ」の掲示物

Small Talk ふりかえりカード			
Name ()			
1 楽しく取り組みましたか。	A	B	C
2 自分の思いや考えを英語で話せましたか。	A	B	C
3 相手の話に対してあいづちやリアクションができましたか。	A	B	C
4 授業の感想（英語について）言えた、言えなかった、分かった、コミュニケーションについて：～さんが～を聞いて・・・			

図4 振り返りカード

児童の自己評価からは、回数を重ねるごとに活動や自身のパフォーマンスを肯定的に評価するようになったことが分かる。特に、「自分の思いや考えを英語で話せましたか」「相手の話に対してあいづちリアクションができましたか」の項目の数値が向上している点からは、児童が自身の成功体験を自覚するようになっていったことが推察される。

② 外国語科についての意識調査

実践の前後に、外国語科についての意識調査（4段階評定尺度形式の3項目）を行った（はい：4、少しはい：3、少しいいえ：2、いいえ：1）。各項目の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）、さらに対応のある*t*検定を行った結果は表3に示す通りである。

表3 事前・事後意識調査の結果（*N*=18）

項目内容	事前		事後		<i>t</i> 値	<i>p</i> 値
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
1 英語で友達と話すのが好き	2.44	0.76	2.94	0.52	-2.70	0.02
2 授業の内容がよく分かる	3.28	0.56	3.39	0.49	-0.70	0.50
3 英語を話す時心配な気持ちにならない	2.39	0.59	2.72	0.65	-2.92	0.01

*t*検定により項目1は、 $p=0.02<0.05$ 、項目3は、 $p=0.01<0.05$ となり、どちらも有意に高まっていることが明らかとなった。「話すこと [やり取り]」に対して肯定的に捉えるようになり、不安感が減少していると言える。項目2については、 $p=0.50>0.05$ となり、有意差は見られなかった。

③ ARCS動機づけモデル（Keller, 2009）に基づくアンケート

本実践での活動の後、児童のSmall Talkに対する学習意欲の指標として、動機づけにつながる「注意」「関連性」「自信」「満足感」の4要因を質問紙によって測定した。（はい：5、少しはい：4、どちらでもない：3、少しいいえ：2、いいえ：1）5段階尺度の平均値と標準偏差は表4に示す通りである。

表4 ARCS動機づけモデルに基づくアンケートの平均（*M*）と標準偏差（*SD*）（*N*=18）

項目内容	<i>M</i>	<i>SD</i>	項目内容	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 おもしろかった	4.28	0.73	4 自分に自信がついた	4.11	0.66
2 やりがいがあった	3.61	0.76	5 活動に満足している	4.00	0.75
3 チャレンジできた	3.72	0.80	6 もっとやってみたい	4.11	0.57

また、それぞれの項目の回答数は表5に示す通りである。

表5 ARCS動機づけモデルに基づくアンケートの回答数（*N*=18）

項目内容	はい	少しはい	どちらでもない	少しいいえ	いいえ
1 おもしろかった	8	7	3	0	0
2 やりがいがあった	2	8	7	1	0
3 チャレンジできた	2	11	3	2	0
4 自分に自信がついた	5	10	3	0	0
5 活動に満足している	5	8	5	0	0
6 もっとやってみたい	4	12	2	0	0

項目1、項目3、項目4、項目5、項目6において、平均値が4以上であり、多くの児童が「はい・少しはい」と回答している。よって、本活動に対する児童の肯定的な反応が伺える。「自信がついた」という項目4の数値からは、児童のSmall Talkに対する高い意欲と共に、高い自己効力感を抱いていることが示唆される。

その一方で、項目2、項目3においては、平均値がそれぞれ「3.61」「3.72」となり、他の項目に比べると低い値となった。Small Talkの活動は、話題こそ変わるが、毎回同じ活動内容のくり返しであり、単調な活動になりやすい。そのため、やりがいや挑戦できたといった気持ちを児童はもちにくかったのではないかと考えられる。

④ 振り返りカードと意識調査の自由記述

表6 振り返りカードの自由記述（2～7回目）

- ・英語がだんだんうまくなっていく感じがします。（3回目）
- ・前よりも話せる幅が広がったのでうれしかったです。（3回目）
- ・前よりもリアクションの英語がすぐ出てくるようになりました。（3回目）
- ・いつもよりコミュニケーションを続けられてうれしかったです。（5回目）
- ・リアクションが毎回多くなってきているのもっと増やしたいです。（5回目）
- ・いつも言えなかった「あなたは？」とか「同じ」とかも言えてうれしかったです。（6回目）

表7 意識調査の自由記述

- ・初めて話すことを教えてもらい、たくさん使えるようになった。
- ・リアクションができるようになった。
- ・最初は全然話が進まなかったけど、7回目では時間が余ることなくたくさん話せてよかった。
- ・必ず、初めてやったときより、単語を言えるようになったと思うし、会話も続くようになったし、お互い楽しく、英語でやっていたので楽しかったです。しかも、「あなたは？」とか、難しい言葉も言えたのでうれしかったです。

児童の自由記述には、対話の技能が高まっていることを実感する記述が多く見られた。つまり、多くの児童が成功体験をもつことができたと言える。自身の成長を自覚し、自信を深め、自己効力感が高まったことが示唆される。

(2) 手立ての有効性

児童の振り返りや質問紙アンケートから、本実践において、自己効力感と動機づけが高まったことが示唆された。以下では、3つの手立ての有効性について、児童の振り返りシートや意識調査の自由記述から、手立てに関するものを取り上げ、検証する。

① 日本語でのペアトークとの連携について

日本語でのペアトークとの連携に関しては、以下のような記述が見られた。

- ・何を話すか確かめられた。
- ・自分がどんなことを話せばいいかが定まってよかった。
- ・日本語で話した内容を英語に変えて話したから、話がまあまあ続いた。
- ・日本語の時のリアクションを参考にして、それを英語で言うことができた。

朝の会のペアトークの話題とその日の外国語のSmall Talkで話す話題を同様のものにしたことで、児童のSmall Talkに肯定的な影響を与えることができたことが推察される。Small Talkで伝え合いたいことを明確にでき、ペアトークでのやり取りをSmall Talkの際に生かす児童の姿も見られた。また、英語で表現することが難しい場合は、日本語の使用も許可したため、互いに沈黙する様子は、あまり見られなかった。日本語でのペアトークとの連携は、Small Talkでの児童の助力となり、児童が成功体験をもつための手立てとして有効であったと示唆される。

② 他の児童の対話の観察について

他の児童の対話の観察に関しては、以下のような自由記述が見られた。

- ・友達のがよかったところとか、がんばって続けたことがよく分かった。
- ・人のSmall Talkを見て、まねしたいと思うところがあって、参考になった。
- ・友達のリアクションとかを見て、次、自分も同じような返答が来たら、こういうリアクションをしようとか考えられた。

友達の対話を見て参考にしたり、友達のがんばりを認めたりする記述が見られた。また、実際の授業では、多くの児童が興味をもって友達の対話を視聴し、感想をつぶやいたり、友達に賞賛の声掛けをしたりする姿が見られた。自由記述や児童の様子だけでは、対話の観察が「自分にもできそうだ」という児童の気持ちを生み、自己効力感を高めることにつながったかを明らかにすることはできなかった。しかし、友達の対話を観察することは、児童にとって英語表現のインプットの機会となり、それを自分のやり取りに生かそうとする児童の姿が見られた。このことが、児童の「話すこと[やり取り]」の技能を高めることにつながり、自信を深めることができたと考えられる。

③ 振り返り場面での対話録画映像の視聴について

振り返り場面での対話録画映像の視聴に関しては、以下のような自由記述が見られた。

- ・動画で振り返ると、いろいろなことに気付いてよかった。
- ・動画で見返すと、ここがんばったなど自分で見返すことができた。
- ・リアクションができていたとかが分かって、やりやすかった。
- ・動画を撮って後から見てみたら、会話が止まっているところがあって、英語って難しいなと思った。
- ・もっとここで話を広げられたらなとかを振り返ることができた。
- ・日本語で言ってしまった言葉が分かった。
- ・自分の言えなかった英語を聞いて、調べたりして言えるようになった。

児童は、対話録画映像を視聴したことで、自分が話した英語表現やリアクションの有無など、細かなところまで注意を向け振り返ることができた。そして、よかった点は自信につなげ、改善点を次の活動に生かそうとする児童の姿が見られた。したがって、対話録画映像の視聴により、児童は自身の対話を具体的に自己評価することができ、それが成功体験を自覚することへとつながったことが示唆される。また、うまくいかなかった点を次の活動に生かそうとする姿勢は、「話すこと [やり取り]」の技能を高めることにつながった。児童は活動を繰り返す中で自身の成長を実感し、自己効力感をさらに高めることができたと考えられる。

6 成果と課題

本研究では、児童同士がやり取りするSmall Talkにおいて、児童が自身の成功体験を自覚したり、他の児童の成功体験場面を観察したりできるような手立てを講じることにより、「話すこと [やり取り]」への自己効力感と動機づけを高めることができると示唆された。自信を深め、意欲が向上したことで、児童が生き生きとコミュニケーションを楽しむ姿が見られるようになった。意識調査の自由記述には、「日常会話のように英語が使えるようになりました。」「私は英語で友達と話すより日本語で話す方が楽しいと思っていたけれど、スモールトークをしたら友達と英語で話すのも楽しいと思いました。」といった記述も見られ、児童はSmall Talkを通して、コミュニケーションの楽しさを実感することができたと考えられる。

一方で、本研究では、わずか7回の活動の検証となり、児童の変容を明確に捉えることが難しかった。言語は長期間にわたって少しずつ習得されていくものと考えられる。そのため、継続的にSmall Talkを実施し、更に長期間にわたって、児童の技能や意欲の変化を検証していく必要がある。また、本実践では、日本語ではスムーズに対話できたのに英語だと自分の言いたいことが英語で表現できず不満感を感じる姿、動画で自分の対話を見返した時に自分の誤りの部分にばかり注目してしまう姿など、逆に意欲の低下につながってしまう児童の姿も見られた。児童がもつ「間違えることは悪いこと」といった考え方を払拭し、誤りを意欲や技能の向上へとつなげていく指導のあり方について、今後研究と実践を重ねていきたい。

7 引用文献・参考文献

- 内山寿彦・染谷藤重 (2019). 「小学校外国語における児童の動機づけを高める授業実践－効果的なスモールトークの使用－」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』第10号, 51-59.
- Keller, J. M. (2009). *Motivational design for learning and performance: The ARCS model approach*. Springer.
- Dörnyei, Z. (2005). Motivation and self-motivation. In Z. Dörnyei (Ed), *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition* (pp.65-119). New York: Routledge.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 牧野眞貴. (2014). 「英語力に差のある学生が混在する大学3年生クラスにおける携帯電話を利用したスピーチ指導実践報告」『リメディアル教育研究』第9巻第1号, 89-97.
- 文部科学省. (2017a). 『小学校学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省. (2017b). 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』